

連載
第20回

福聚山史

池浦 泰憲
及川 一晋
編 文

大正から昭和にかけて

2、淀橋七地蔵と昭和初期の社会

万霊供養塔の前を通り過ぎ、当山墓所に入つてすぐ、本堂脇に「淀橋七地蔵」と呼ばれる七体の地蔵が建っている。毎年九月二十日には、この地蔵の前で水子供養が行われている。この七地蔵の建立の経緯については、次にあげる地蔵脇に掲げられた説明板(由緒書)から知ることができる。

淀橋七地蔵は、昭和の初め惨酷を極めた大久保町の眞子殺し夫婦の手により哀れな死を遂げた男女七児の霊を弔うため、当時の淀橋警察署長や同町長等が相談の上常円寺住職の及川眞能師が施主となられて、昭和五年六月七日同寺に葬り、『弔男女七児之墓』の墓標と、「平生年月日不明男子之霊」と記された七本の卒塔婆を建てて懇ろに供養されました。此の事を伝え聞いた青山の石勝さんが地蔵七体を刻んで寄附されたので、七地蔵協賛会が組織され多くの情けある人々の手により同年七月十日無縁行路死亡者の霊を併せて盛大なる法要を営まれました。(以下略)

この説明からわかるように、この地蔵は昭和五年七月、当山三十三世及川眞能上人を施主として造立された。そのきっかけが、昭和五年五月に発覚した「大久保の眞子殺し」という事件である。この事件の概要については、当時の

新聞記事から知ることができる。(以下引用は『東京朝日新聞昭和五年六月二日夕刊』より)。

三十日午後十時頃、新宿駅へ錦しゃの黒地の羽織を着て髪をくし巻きにした二十六、七歳位の奥さん風の婦人が、九歳位の水平服を着た女の子を連れ、正ちゃん帽を冠つた幼児を抱いてシボレー箱型自動車に乗って横づけにし、赤帽の平庄蔵を招き車内から大型トラック一個及び石油箱一個を渡し、『一寸そこまで行つてくるから預かつて置いてくれ』と、小石川区竹早市場内田よしえと記した手紙の紙片を渡し、そのまま立ち去つてしまつた。赤帽の平がその荷物を受け取つて見ると、非常な悪臭が発散するので、直に張込中の淀橋署員に報告した。宮田署長は急報に接し直に阿部刑事部長と現場に駆けつけてトラックをあけて見ると生後一ヶ月位の女兒の絞殺死体が三個現れたので大いに驚き更に石油箱をあけて見ると中には石油カンが二個あつてその中には同様の死体が油紙に包み一つのカンに二つづつ入れてあり都合七個のえい児の絞殺死体が出てきたので大騒ぎとなり。(以下略)

昭和五年五月三十日夜、新宿駅の赤帽に一人の婦人が預けたトラックと石油箱の中から生後間もない子供の死体が七体も発見される。直ちに警察は産婆や産院など捜索を開始するが、その結果捜査線上に浮かび上がったのが、「最近の新聞紙にあるもらい児広告のうち、転々と居所をかへる(変える)」「元警察

官の中島伊八郎という人物であつた。伊八郎は翌朝逮捕され、その犯行の全てが自供された。殺された子供はいずれも産婆から、二十円〜百円の養育費とともにもらい受けた子供達であつた。

「つじた」もらい子殺しの事件は、古くは明治四十二年に佐賀でおこつているが、特に昭和初期に多くみられた。この大久保の事件の直前の昭和五年四月にも板橋で同様に複数のもらい子が殺されるという事件が発覚している。これ以後も昭和八年東京で、さらに戦後の昭和二十三年一月にも新宿の柳町で産院の院長夫婦が逮捕されている。いずれも子供



毎年9月20日には、淀橋七地蔵の前で水子供養が行われる

とともに受け取る養育費が狙いであつた。ところで、これらの事件は、当時の社会状況が生みだした事件であつた。先の新聞記事にみられたように、新聞に「もらい児広告」が掲載されていたことから、「もらい子」という風習が、ある程度社会に通用していたことといふことができるだろう。

しかし、子どもを手放す人の多くは、子どもを公にできない何らかの事情を抱えた、相当の身分地位のものと言われ、このように明るみに出るのは氷山の一角であつたと考えられる。一方、こつして手放された子どもは、多くは産院や産婆から複数の手を経ることもあつたといふ。そして、最終的には貧困層と呼ばれる人々の手に、残されたわずかな養育費とともに渡つたと言われる。

当時の社会で一般化していた「もらい子」という風習すべてが、養育費の搾取を意図していたはずはない。しかし、「もらい子殺し」という事件が、社会に放置された「貧困」という背景から起つたことは間違いない。明治期からの日本の近代化、限定して言えば東京の大都市化の中で、今からは想像できないほどの貧困生活がその底辺に存在していたことも事実である。明治期の貧民街を描いた松原岩五郎の『最暗黒之東京』という本がある。大平洋戦争によつて日本の社会は劇的に変化するが、昭和初期は明治以降の日本の近代化の流れの末端に位置する。『最暗黒之東京』は未だに存在していたのである。そして当時の日本の国家、社会はそつた生活への目はほとんど向いていなかったといつてよい。

淀橋七地蔵は、こつした近代化によつて生み出された『暗黒』の中へ消えていった「小さな命」への慰霊のため造立されたのである。